

震災乗り越え未来へ

アクアマリン裏側密着

ジャーナリストスクール4班の5人は1日、いわき市の環境水族館アクアマリンふくしまを取材した。普通は入れない水族館裏の餌やり場に入った。同水族館は東日本大震災で水槽が割れるなどの被害があり、魚の9割が死んだ。しかし、2011年7月15日に再オープンした。今では震災前よりも魚の種類が多く、来場者数も震災前よりは減ったが、少しずつ回復してきている。津波や地震の影響を多く受けても、苦難を乗り越える「アクアマリンふくしま」が復興に歩む姿は力強い。(渡辺)



アクアマリンふくしまで、魚に餌を与える4班のメンバー

関係者以外立ち入り禁止の場所に、入らせてもらった。飼育員をしている上原智行さん、藤井健一さんにお話をうかがった。

水族館で最も大変な仕事は「餌やり」だ。1つの水槽に、30キロから40キロのえさを毎日与える。その他にも、展示を

していない魚を飼育したり、水槽をきれいにしたりと、さまざまな仕事がある。約13万匹の魚の世話をし、福島の海の素晴らしさを県内外に伝える。

また、水槽の深い場所にいる魚にも食べてもらうように餌を水面に叩き付けて与えるなど、水族館ならではの工夫や、知識も習った。(村山)

バシヨウカジキやアカマンボウ飼育 世界初に挑む

アクアマリンふくしまでは現在、約800種、13万匹の生物を飼育している。震災以前は約75

0種、20万匹だった。東日本大震災により深刻な被害を受けたが、県民の期待に応えるために懸命の努力を続けている。

新しい試みとして、バシヨウカジキやアカマンボウなど新しい種類の生物を飼育しようとする動きがある。世界初の挑戦で、飼育員の上原さん、藤井さんの2人は意欲を燃やしている。(岩谷)

巨大魚用担架に乗ってみた



魚用の担架に乗せられる鈴木君

取材したときに、担架に乗せられた。ナポレオンフィッシュやサメなど大きな魚を運ぶための担架で、ビニールと木の棒で出来ている。少し固い感触だった。特別な体験で、とても楽しかった。(鈴木)

進め！4班
アクアジャーナル

シーラカンス 2種標本展示

世界唯一



シーラカンスイラスト・岩谷卓磨

アクアマリンふくしまでは、シーラカンスの標本を展示している。アフリカとインドネシアで採

取した。2種類のシーラカンスを展示しているのは、世界でアクアマリンふくしまだけだ。シーラカンスは古代から同じ姿のまま現代まで生きていたため、過去の海の情報を分析できるかもしれないと調査に力を入れる。職員がインドネシアやアフリカを何度も訪れている。(根本)

私たちが作りました

(左から) 根本葵(薫小5年) 岩谷卓磨(秀英中1年) 鈴木元大(赤井小5年) 渡辺里菜(泉中2年) 村山くるみ(錦東小6年)